

開会挨拶

国土交通省中部地方整備局長
大村 哲夫



中部地方整備局長の大村でございます。

今日は年度末の大変お忙しい中、こんなに大勢の方がこのシンポジウムにご参加いただきまして心から感謝申し上げます。

国土形成計画シンポジウムということで、非常に難しい、聞き慣れない名前になっておりますけれども、これからの日本の国のあり方を皆さんと一緒に考えていこうというシンポジウムでございますので、気楽にお聞きいただければと思います。

国土づくりにつきましては、昭和37年から全国総合開発計画という形で、国土のあり方について5次にわたりまして計画を作ってきたわけでございますけれども、その計画は国土庁という役所が作っておりました。今はなくなってしまいましたけれども、私自身、3次と4次の間くらいに国土庁に在籍をしております、全国総合開発計画に関係をした経験がございます。

当時、国土庁はよく言えば霞ヶ関のシンクタンクということですが、各省庁の若手の公務員、あるいは鉄道会社の方、銀行の方が集まって、これからの国土のあり方を考える役所であったわけでございます。場所が霞ヶ関から少し離れて、麻布狸穴という所にありました。それも仮庁舎で、麻布郵便局の一部をお借りして執務していたような状態でございました。狸穴は「タヌキの穴」と書くのですね。霞ヶ関の人事権を持っている上司がいないところで集まってやっているので、非常にのびのびと仕事をしておまして、「あいつらは小タヌキ」みたいに言われていたのですが、私はその頃まだ、スッキリした顔をしていましたので小ギツネくらいでありますけれども、非常に自由闊達に議論したことを覚えております。

ちょうど25年前になるわけですが、当時の国土計画のテーマは国際化、情報化に日本の国がこれからどうやって対応していこうかという議論でございまして、25年前にすでに中部国際空港の話でありますとか、大量で低コストの国際情報シ

ステムをどのように作り上げていくかということを一生懸命議論しました。そこにいた人たちが、元の役所に戻ったり、あるいは銀行に戻ったりされ、一緒に机を並べていた人が知事になったり国会議員になったりして、今まさにそういうものが実現しているわけでございます。そういう意味で、21世紀、これからの国土のあり方を皆様方と一緒に考えていくプロセス自体が大変大事だと私自身思っております。

これからの国土のあり方を考える上で2つの大きなポイントがあると思います。

1つは、この国土が地球温暖化という、人類が経験したことがないような急激な気候変化に見舞われることでございます。過去6,000年の間に2度の温度変化があったわけでありまして、すでにこの100年間で0.6度の温度変化があったということで、大変な温度変化の中でこの国土をどのように守っていくかという問題。

もう1つは、人口が減っていく社会になるということです。これまで戦争とか飢饉とかを除きまして、日本列島で人口が減ったことはないわけですが、これからは人口が減っていく社会を迎える。そういった中で、どのような方向で国づくりを考えていくかということだと思いますけれども、私自身が考えておりますのは、明治維新のときに富国強兵という国是を決めたわけでありまして、それで頑張ってきました。ところが、第2次大戦で“強兵”の部分はやめて“富国”、経済大国になろうということを進めてまいったわけでございます。

これから21世紀の中で、日本が世界から、アジアから憧れられる国になるためには、やはり文化力を鍛えていかなければならないのではないかと考えております。そういう意味で今日は、パネラーの皆さん、コーディネーターの皆さん、それぞれ専門の分野で非常にすばらしい見識をお持ちの方々でございますけれども、一方で個人的には非常に文化的な方々でございます。そういう方々を迎えて、今日のシンポジウムが皆さんと一緒に考えていくこれからの国づくりの一つの契機になりますことを希望申し上げまして、開会に当たりましてのご挨拶とさせていただきます。

基調講演

国土形成計画の策定に向けて ～中部の目指すべき方向～

東海旅客鉄道(株)相談役 須田 寛氏

ただいまご紹介をいただきました須田でございます。

お手元に簡単なレジュメをお配りしてございますので、それをご覧いただきながらお聞きいただければと思っております。

2つのパートに分けてお話しをしてみたいと思います。前段は、先ほど局長からもお話がございました、現在、国で策定を進めており、これは地方も一緒に進めていくことになるわけですが、国土形成計画の考え方が中部にどのような影響をもたらすのかということについてお話しをしたいと思います。後段では、私もいろいろな有識者の方々と一緒に「まんなか懇談会」と略称しておりますけれども、中部有識者懇談会というのがございます、その中部有識者懇談会でだされた提言、「まんなか懇談会ポスト万博宣言 テイクオフ中部2005」(以下、「提言」)があります。ポスト万博で一体どういことをすべきかについて、やや長期的な視野に立ってまとめたものでございます。その「提言」と、先ほどの国土形成計画との関連等をまとめながらお話しをしたいと思います。

(1) 国土形成計画の策定について (国土形成計画の考え方)

「開発計画」から「形成計画」へ…【更新】

まず、なぜ国土形成計画というものが出てきたかということでございますが、先ほど中部地方整備局長からお話ございましたが、これはもともと全国総合開発計画と申しておりました。経済企画庁から昭和37年に発表されたわけでありまして、私はその策定作業をしております35～36年にちょうど経済企画庁におりましたものですから、この作業の第1回目、1全総の下請作業を若干手伝ったことがございます。大変な熱気でございまして、当時、所得倍増計画と合わせて、この開発計画が経済企画庁で立案されたわけでございます。

同時にまた、地方から陳情団が来たように思っております。新産業都市という地方の拠点を指定して、それを中心に地方を発展させていこう。当然そこにはインフラ投資も伴うものであ

りますから、そういう陳情が非常にたくさんあったような記憶がございます。

いずれにいたしましても「開発」という名でわかりやすく、いろいろな新しいことをやっていたこととございまして、同時にその後、これがやや誤解を与えた面があったように思います。すでに5回の全総を経ておりまして、現在は5全総でございます。何でもかんでも各地にフルセットのインフラが整備されるのだというふうな誤解を与えた。空港・新幹線・高速道路のインフラの3点セットというのでありますが、この3つが全部出てくるのが開発計画なのだという誤解を与えたおそれがあります。それで、インフラ整備の陳情をする材料のようなものとして取られてしまった問題があったと思います。

そういう面も皆無ではなかったと思いますけれども、そういった誤解を解きながら、「国土の均衡ある発展」ということをずっと掲げてまいりました。「均衡ある」ということが、どこにでも新幹線や空港や高速道路を作ることだというふうな誤解されてしまったわけでありまして、そういう誤解を解きながら、そして「均衡ある発展」という言葉の意味はそのまま継承しながら、何か国民全体の共感の得られるような、現代にふさわしい計画にしていってどうか、これが国土形成計画の発想の起点であったと思います。

換言いたしますと、従来のものは日本の国がどんどん成長していく過程であったものですから、どちらかといえば開発型のものであったと思いますが、現在はすでに成熟社会になって、一応開発は行き渡りました。未開発なところも残っておりますが、全体的には一応成熟した社会になってきた。その中で、もう一度国土計画をどう考えたらいいか、考え直してみようではないか。これが今回の国土形成計画の非常に大きなポイントではない

